

愛知県立芸術大学
「病院アウトリーチプロジェクト」
2025 年度報告書



2026 年 3 月

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」委員会

目次

ごあいさつ	安原雅之.... 3
「病院アウトリーチプロジェクト」について	安原雅之.... 4
プロジェクト実施体制・協力組織	畑陽子.... 5
謝辞	安原雅之・七條めぐみ.. 7
2025 年度事業報告	8
1. 2025 年度の「病院アウトリーチプロジェクト」	七條めぐみ.. 8
2. 2025 年度アウトリーチ実施一覧	畑陽子.... 10
3. 2025 年度 授業概要	七條めぐみ・中村由加里・畑陽子.....11
4. 東部保育園へのアウトリーチ実施	中村由加里 ... 18
5. 北保育園へのアウトリーチ実施	佐藤杏奈 ... 19
6. てとろ保育園へのアウトリーチ実施	倉橋祐佳里 ... 20
7. 藤田医科大学病院へのアウトリーチ実施	佐藤杏奈 ... 22
8. 豊田西病院へのアウトリーチ実施	倉橋祐佳里 ... 24
9. 名城病院へのアウトリーチ実施	中村由加里 ... 26
10. アール・ブリュット	安原雅之・石川貴憲... 27
11. 「四国こどもとおとなの医療センター」見学報告	七條めぐみ ... 32
12. 保育園での実験報告	七條めぐみ.. 36
振り返り.....	38
1. 「病院アウトリーチプロジェクト」9 年度目の振り返り	三木隆二郎.. 38
2. メンターとしての振り返り	中村由加里・倉橋祐佳里・佐藤杏奈.. 41
3. 受講生の振り返り	44

※本報告書に掲載した写真については、実施先の施設より掲載の許諾をいただいております。

ごあいさつ

プロジェクト代表 音楽学部教授 安原雅之

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」の2025年度の報告書をお届けします。このプロジェクトは本学の学長特別研究費を得て「試行」という形で2017年度からスタートしたのですが、現在は大学の事業のひとつとして、さらに発展した形で実施されています。

今回の報告書は、2025年度に実施された「病院アウトリーチプロジェクト」の概要を取りまとめています。いま、大学は少子化や予算削減等、さまざまな課題を抱えています。一方、このような活動に関心を持った学生は増えています。今後も、教育機関としての人材育成・教育、また、地域に根ざした大学として、地域に開かれた活動を継続していきたいと考えております。

資金面では、東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様と副会長・筒井陽子様ご夫妻からのご寄付に加え、公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団様より第40回（令和6年度）研究助成に採択して頂き、今年度の活動資金に充てることができました。みなさまからのご支援は、プロジェクトの大きな支えになっています。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

本学の「病院アウトリーチプロジェクト」は、教育面や芸術面で成果を挙げるだけでなく、地域貢献にも役立っています。来年度もさまざまな「場」での色々な形態による実践にチャレンジする予定です。

このプロジェクトに対して今後ともみなさまのご支援をいただきたく、よろしく願いいたします。

「病院アウトリーチプロジェクト」について

代表 安原雅之

このプロジェクトは、芸術を必要としていながらホールや美術館に足を運ぶことが困難な方たちの元へ、芸術家が出向いてアートを届けるアウトリーチ活動のうち、届け先を病院や福祉施設に絞って実践するもので、本学の大学院在生を対象に、病院等における良質な芸術活動に関わるアーティストを育成します。

そのために大学院音楽研究科では「アート・マネジメント」の授業を拡充し、病院等における芸術活動に特化した講座を開設しました。受講生は、前期は子供向け、後期は病院や福祉施設に特化したアウトリーチに関して理論と実習を通じてノウハウを学びます。また、美術研究科で開設された「インクルーシブ・アート」の授業と連携しながら、共通のテーマについては合同授業で学ぶ体制をとっています。

これらの学修と実践を経験することによって、学生は「自ら企画し、実施できる」スキルを身に付けます。

アートによって人に心の癒しを与え、病院や福祉施設にとっては環境の向上になり、芸術家にとっては社会経験の場となり、本学にとっては地域貢献と卒業生のキャリア育成支援となります。

医療や福祉の現場における芸術活動は、必要性は認識されながらもいまだにノウハウが確立していませんが、本学でそれに関わる芸術家が育成されることにより、愛知県はもとより、日本全体にとって大きな成果が生まれることが期待されます。

◎本プロジェクトの活動紹介ページ（愛知県立芸術大学ウェブサイト内、過年度の活動報告をご覧ください）

・和文

<https://www.aichi-fam-u.ac.jp/social-research/social/05.html>

・“Hospital Outreach” (English)

<https://www.aichi-fam-u.ac.jp/en/explore-aua/social-relations/hospital.html>

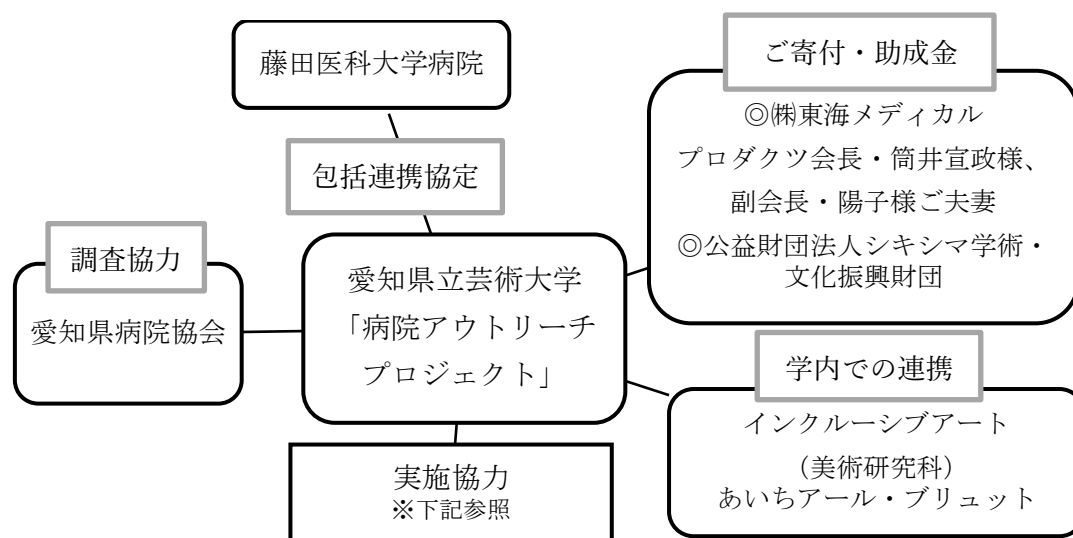
◎本プロジェクトの YouTube チャンネル

<https://youtube.com/channel/UC-6n63JaJX6zHABOWVqifcA?si=9MWpRp9UxtQbv3ne>

プロジェクト実施体制・協力組織

畑陽子

このプロジェクトは、アウトリーチを行うアーティストの育成、医療機関をはじめとした実施先における芸術活動に関する調査・研究を行うとともに、芸術による地域貢献も射程に入れた活動です。プロジェクトの実施にあたっては、昨年度に引き続き、株式会社東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様、副会長・陽子様ご夫妻、今年度からはシキシマ学術・文化振興財団からのご寄付、助成金によって活動してまいりました。また、藤田医科大学病院、長久手市文化の家をはじめ、地域の医療機関、福祉施設、文化施設等から多大なご支援・協力をいただきました。以下に、簡潔にその体制を示します。



2025 年度実施協力・実施先

【実施協力】

長久手市文化の家

【実施協力・実施先】

藤田医科大学病院（豊明市）

豊田西病院（豊田市）

名城病院（名古屋市中区）

東部保育園（尾張旭市）

北保育園（知多郡武豊町）

てとろ北保育園（長久手市）

てとろ大永寺保育園（名古屋市守山区）

2025年度プロジェクトメンバー

代表 安原雅之（本学教授・音楽学）

副代表 佐藤直樹（本学教授・デザイン）

スーパーバイザー 三木隆二郎（アートマネジメント実務）

オブザーバー 井上さつき（本学名誉教授・音楽学）

アドバイザー 村瀬香（本学非常勤講師・音楽療法）

コーディネーター 中村由加里（本学卒業生・クラリネット奏者）、倉橋祐佳里（本学卒業生・ピアノ奏者）、佐藤杏奈（本学卒業生・サクソフォン奏者）

事務局長 七條めぐみ（本学専任講師・音楽学）

事務局 畑陽子（本学卒業生・音楽学）

謝辞

安原雅之・七條めぐみ

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」は、中部地区の医療系企業、財団、さらには実践先の保育園や病院から多大なご支援をいただいています。

まず、株式会社東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様、副会長・陽子様ご夫妻からは、2017年度に500万円のご寄付を頂戴しました。ここに厚く御礼申し上げます。この資金は例年、院内コンサートをはじめとするアウトリーチ活動の演奏者謝金・交通費、楽器・機材運搬費、チラシ等の作成費などの運営費に活用させていただいています。副会長の筒井陽子様からは、長い入院生活を送られた次女、佳美様に付き添っていらしたご経験から、病院アウトリーチは立派なコンサートを開くことが重要なのではなく、必要とされる方にどこまで寄り添った演奏ができるかが大事であるという貴重なご助言をいただきました。このご助言を受け、本プロジェクトでは「聴き手に寄り添う」という姿勢を重視したアウトリーチを行ってまいりました。活動を通じて、学生たちの中には、演奏曲目や話し方を工夫する姿勢が確かに根付いてきています。

また、2025年度には、公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団様より、第40回（令和6年度）研究助成に採択して頂き、50万円の助成金を頂戴しました。ここに厚く御礼申し上げます。この資金は、今年度の活動のうち、指導者謝金、ならびに医療分野に芸術を届けるアウトリーチ活動の実践的研究にかかる経費として活用させていただきました。

さらに、社会福祉法人てとろ てとろ北保育園様、同てとろ大永寺保育園様、学校法人藤田学園 藤田医科大学病院様、医療法人研精会 豊田西病院様、国家公務員共済組合連合会 名城病院様に、謝金をご負担いただきました。ご支援に厚く御礼申し上げます。

アウトリーチは通常のコンサートと異なり、会場となる保育園や病院、福祉施設のご理解とご協力があって初めて成り立つものです。本プロジェクトの趣旨に共感いただき、患者さんや子供たちのためにとアウトリーチを受け入れていただいたご関係の皆様、心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

1. 2025 年度の「病院アウトリーチプロジェクト」

七條めぐみ

「病院アウトリーチプロジェクト」は 2025 年度に 9 年度目を迎えた。今年度は、前期には 4 か所の保育園、後期には 3 か所の病院でのアウトリーチ公演を行った。それに加えて、愛知県立大学神谷教授との共同研究として、保育園での実験を行ったり、医療におけるアートの先進事例として香川県の「四国こどもとおとなの医療センター」を見学したりと、プロジェクトとして新たな展開が生まれた一年であった¹。

授業と結びついた実践では、前期には、尾張旭市立東部保育園、武豊町立北保育園に加えて、社会福祉法人てとろより、てとろ北保育園、てとろ大永寺保育園の合計 4 か所に伺った。昨年度に引き続き、「シェアド・ゴール Shared goal (共通目標)」²や「エントリー・ポイント」³を盛り込んだ企画作りを重視するとともに、昨年度課題であった、1 年目と 2 年目の受講生が互いに刺激を与えあうチーム組みを考慮した。結果として、保育現場のニーズに寄り添いつつ、芸術大学院生ならではの良質な演奏を届けるという目標は、おおむね達成されたと言える。

後期には、藤田医科大学病院、豊田西病院、名城病院にて、合計 5 回のアウトリーチ公演を行った。今年度の新たな取り組みとして、豊田西病院では、従来の外来患者さん向けの公演だけでなく、入院患者さん向けの公演を実施した。病棟へのアウトリーチは、2018 年度にあいち小児保健医療総合センターで実施して以来、コロナ禍以降では初めてである。病院の外に出られない入院患者さんの元へ芸術を届けるアウトリーチは、本プロジェクトが目指す究極の形であり、それを実現できたことは、本プロジェクトにとって重要な一歩と言える。また、名城病院へはコロナ禍前の 2019 年度に、本プロジェクトスタッフによる公演を行って以来、6 年越しに受講生によるアウトリーチが実現した。藤田医科大学病院では、当初予定していた 2 公演のうち 1 公演が、出演者の体調不良によりキャンセルになり、後日振替公演を実施させていただくことになった。冬季の実践では特に感染症のリスクが強まるため、受講生への予防喚起に努めるとともに、急

¹ 「四国こどもとおとなの医療センター」見学については、本報告書 32 ページ、保育園での実験については、同 36 ページを参照されたい。

² アウトリーチの演者と受入先が共通して抱くことのできる目標を指し、アウトリーチを通じて何を実現したいのかを言語化したものである。本プロジェクトの先駆的存在である、アメリカのカーティス音楽院が提唱している。

³ アウトリーチにおいて、対象者の関心を演者に惹きつける手段のこと。

なキャンセルが出た際に代役を手配するなどの仕組みも検討する必要がある。

その他、2025年度には「病院アウトリーチプロジェクト」の修了生を病院や福祉施設に優先的に派遣するための「登録アーティスト制度」の準備を進めた。これは、プロジェクト修了生によるアウトリーチ活動を支援することで、アウトリーチの質を担保し、修了生のキャリア支援につなげるというものである。その一環として、例年プロジェクト修了生が出演している「あいちアール・ブリュット」の福祉施設向けアウトリーチにおいて、「病院アウトリーチプロジェクト」の仕組みを導入した。すなわち、演奏者がコンサートの趣旨や訪問する施設の特色を理解した上で、事前に施設の担当者と打合せを行い、リクエストを募るなどしてプログラムを考えるという流れである。そうすることで、授業で実施しているアウトリーチと同様に、訪問先のニーズと演奏者の持ち味を生かしたプログラミングが可能となり、アウトリーチの質を高めることができる。来年度以降、「登録アーティスト制度」を本格的に運用することで、より多様なアウトリーチのニーズに応えていきたい。

2025 年度事業報告

2. 2025 年度アウトリーチ実施一覧

畑陽子

2025 年度アウトリーチ実践一覧

通算公演回数	実施日	会場名 企画名 (ねらい)	対象者 出演者	公演時間 (分)	参加者 (人)	スタッフ (人) 〔注1〕
1	6月23日	てとろ大永寺保育園 (名古屋市守山区)	園児、保育士	20	34	1
2		物語を通して、色々な楽器の魅力、音楽の楽しさを知ってもらう	佐伯昌恭 (バリトン)、北川温子 (ピアノ)、寺島はな (ヴィオラ)、山家隆司 (トロンボーン)	20	16	
3				20	21	
4	7月22日	北保育園 (知多郡武豊町)	園児、保育士	20	22	2
5		音楽の3要素を元に、音楽の楽しみ方を知ってもらう	小野心音 (ピアノ)、野々笑莉 (サクソフォン)、田爪佑佳 (パーカッション)	20	23	
6				20	25	
7				20	25	
8	7月24日	てとろ北保育園 (長久手市)	園児、保育士	20	18	3
9		クラシック音楽に出会い、新しい経験を楽しんでもらう	佐伯昌恭 (バリトン)、武藤寧音 (ピアノ)、畑こはる (ソプラノ)、門永希 (ヴァイオリン)	20	17	
10				20	23	
11	7月31日	東部保育園 (尾張旭市)	園児、保育士	15	24	2
12		音楽が自己表現のひとつになり得るということを感じてもらう	山下菜々 (フルート)、奥ノ坊悠 (ピアノ)、加藤七帆 (コントラバス)	20	17	
13				20	26	
14				20	27	
15	1月29日	豊田西病院 (豊田市) 普段あまり触れる機会のないジャンルの音楽を聴いて、素敵な気持ちになってもらう	患者、病院スタッフ 緒方優月 (ピアノ)、堀川愛夏 (ピアノ)	60	41	2
16	1月30日	豊田西病院 (豊田市) 心踊るひとときを、音楽とともに	患者、病院スタッフ 山家隆司 (トロンボーン)、奥ノ坊悠 (ピアノ)、野々笑莉 (サクソフォン)	60	約50	2
17	2月3日	名城病院 (名古屋市中区) 患者さんがイメージしやすい身近なテーマの曲を通して、癒しと希望を届ける	患者、病院スタッフなど 佐伯昌恭 (バリトン)、畑こはる (ソプラノ)、小野心音 (ピアノ)	45	約80	2
18	2月6日	藤田医科大学病院 (豊明市) バレエ音楽や親しみやすいメロディを通して情景を思い浮かべながら楽しんでもらい、心が軽くなる時間を届ける	患者、病院スタッフなど 藤井彩乃 (ピアノ)、武藤寧音 (ピアノ)	45	約100	2
〔注2〕		個々の強みを生かし、患者さんと様々な世界を共有しながら心を休めていただく	瀬戸口祐也 (バリトン)、山下菜々 (フルート)、天野実音 (ピアノ)、田爪佑佳 (パーカッション)			
19	3月26日 (予定)	藤田医科大学病院 (豊明市) 個々の強みを生かし、患者さんと様々な世界を共有しながら心を休めていただく	患者、病院スタッフなど 瀬戸口祐也 (バリトン)、山下菜々 (フルート)、奥ノ坊悠 (ピアノ)			
合計					約589	

※2026 年 2 月 19 日現在

〔注1〕 スタッフの人数は「病院アウトリーチプロジェクト」関係者のみ計上し、実践先の施設関係者は含まれない。

〔注2〕 出演者の体調不良により 3 月 26 日に延期となった。

3. 授業概要

七條めぐみ・中村由加里・畑陽子

2025 年度の「アート・マネジメント 1 / 2」では、前期に 4 か所の保育園、後期に 3 か所の病院でのアウトリーチを実施した¹。授業では「病院アウトリーチプロジェクト」スーパーバイザーやゲスト講師による講義を行い、アウトリーチに必要な心構えや保育・医療・福祉分野の現状などを学習した。実践に向けては、メンター（本プロジェクト・コーディネーター）がそれぞれ 1~2 チームを受け持ち、プログラム作りとランスルー（通しリハーサル）、振り返りを行った。さらに、保育園・病院の下見に伺ったり、担当者から施設やアウトリーチ対象者に関する説明を受けたりして、対象者への理解に努めた。

なお、本授業は美術研究科における「インクルーシブ・アート」と連携しており、昨年度に引き続き佐藤直樹教授（デザイン）、佐藤文子准教授（陶磁）によるレクチャーを音楽の大学院生が受講した。

本稿では、今年度の授業内容一覧を掲載し、授業担当者、スーパーバイザーおよびゲスト講師によるレクチャーの内容をまとめる。

授業担当：安原雅之、佐藤直樹、七條めぐみ、中村由加里（後期のみ）

講義担当：三木隆二郎

メンター：中村由加里、倉橋祐佳里、佐藤杏奈

サポート：畑陽子

受講生内訳：

【前期】声楽 3 名、ピアノ 4 名、弦楽器 3 名、管楽器 3 名、打楽器 1 名

【後期】声楽 3 名、ピアノ 7 名、管楽器 3 名、打楽器 1 名

¹ アウトリーチの実施一覧は本報告書の 10 ページ、各公演の詳細は同 18 ページ以降を参照されたい。

前期の授業内容と講師

	日付	講座名・講師名・内容
第1回	4月16日	ガイダンス
第2回	4月23日	「プロジェクトの活動紹介」七條めぐみ（本学音楽学部講師、本プロジェクト事務局長）、メンターと受講生の面談、実践のチーム分け
第3回	5月7日	「芸術アウトリーチことはじめ——地域を創る仕掛人」「保育園アウトリーチ入門」三木隆二郎（本プロジェクト・スーパーバイザー）
第4回	5月14日	停電のため休講
第5回	5月21日	企画作り ゲスト：佐藤直樹（本学美術学部教授／デザイン）
第6回	5月28日	「北保育園について」（Zoom）黒田真由美先生（北保育園（知多郡武豊町）園長）のお話、企画作り
第7回	6月4日	「レイモンド橋本保育園での生活と音楽」丹下聡子先生（フルート奏者／博士（音楽）／保育士）、企画作り
第8回	6月11日	企画作り
第9回	6月18日	てとろ大永寺保育園（6月23日実施）のランスルー、企画作り
第10回	6月25日	6月23日の実践の振り返り
第11回	7月2日	企画作り
第12回	7月9日	北保育園（7月22日実施）、てとろ北保育園（7月24日）のランスルー
第13回	7月16日	企画作り
第14回	7月23日	てとろ北保育園（7月24日）、東部保育園（7月31日）のランスルー、ゲスト：生田創さん（長久手市文化の家館長）
第15回	8月6日	7月22日、7月24日、7月31日の実践および前期の振り返り

後期の授業内容と講師

	日付	講座名・講師名・内容
第1回	10月1日	ガイダンス、メンターと受講生の面談、実践のチーム分け
第2回	10月8日	「病院や福祉施設でアウトリーチを初めて行う際の留意点」三木隆二郎、チームメンバーでアイスブレイク
第3回	10月15日	企画作り
第4回	10月22日	「アールブリュットへの活動について」佐藤文子先生（本学美術学部准教授／陶磁）
第5回	10月29日	企画作り、「名城病院について」（Zoom）丸山善生さん（名城病院）
第6回	11月12日	企画作り
第7回	11月19日	「藤田医科大学病院について」（Zoom）石原慎先生（藤田医科大学医学部教授）、企画作り
第8回	11月26日	「音楽家のためのチラシ作成ワークショップ」佐藤直樹（本学美術学部教授／デザイン）、企画作り
第9回	12月3日	「豊田西病院について」（Zoom）馬場啓介さん（豊田西病院）、企画作り
第10回	12月10日	企画作り
第11回	1月7日	「音楽の感情推定の試み」神谷幸宏先生（愛知県立大学情報科学部教授／ICTテクノロジー研究所長）
第12回	1月14日	豊田西病院（1月29日、1月30日実施）のランスルー
第13回	1月21日	「福祉施設での演奏活動」石川貴憲さん（サクソフォン奏者）、名城病院（2月3日実施）のランスルー
第14回	1月28日	藤田医科大学病院（2月6日実施）のランスルー、企画作り
第15回	2月11日	1月29日、1月30日、2月3日、2月6日実践の振り返り、後期の振り返り

授業内容および授業の様子

【前期】

2025年4月23日

講義担当：七條めぐみ

内容：「病院アウトリーチプロジェクト」の活動紹介

「アウトリーチ」という言葉の定義、日本国内での広がりについて触れた上で、本プロジェクトが目指すアウトリーチはどのようなものか、通常のコンサートとどのように異なるのか、過去の実践例を紹介しながら講義した。

2025年5月7日

講義担当：三木隆二郎

内容：芸術アウトリーチことはじめ、保育園アウトリーチ入門

本プロジェクトのスーパーバイザーによる、年度初めに行う導入的な講座である。自身の活動紹介も交えながら、芸術アウトリーチとはどのようなものか、教育・福祉・医療の3つの分野別に特徴を説明した。保育園へのアウトリーチについては、企画を考える上で指針となる“Shared Goal”（共通目標＝アウトリーチの実践者と受入側の双方に有益な目標）および“Entry Point”（エントリー・ポイント＝対象者の関心を惹きつける手段）について説明した上で、打合せの基本的な留意事項を確認した。

2025年6月4日

ゲスト講師：丹下聡子先生（フルート奏者／博士（音楽）／保育士）

内容：レイモンド橋本保育園での生活と音楽

丹下先生が勤務先の保育園で実践されている音楽活動について、保育所保育指針における位置づけを踏まえた上で、実践内容について動画や音声を用いながら説明していただいた。受講生にとっては、保育に音楽を取り入れる意義を確認するとともに、子供たちが音楽に触れてどのような反応を示すのか具体的なイメージを得る機会となった。

【後期】

2025年10月8日

講義担当：三木隆二郎

内容：医療福祉施設でのアウトリーチと社会保障

病院や福祉施設で行うアウトリーチが施設にとってどのような意味をもつのか、医療現場ならではの課題や打合せ上の留意点、企画作りのポイントを説明した。後半は、大学院修了後に音楽家として活動していく受講生に向けて、社会保障制度の基本について説明した。特に、受講2年目の院生からは、「自身の将来をしっかりと考えようと思った」などの声上がり、より現実的に受け止める様子が見られた。

2025年10月22日

講義担当：佐藤文子先生（本学美術学部准教授／陶磁）

内容：アール・ブリュットへの活動について

佐藤先生がご自身の研究として取り組まれている、障害者芸術活動支援事業及び“あいちアール・ブリュット”での出前講座についてお話しいただいた。対象者が主役であるということを前提に講座内容を考えるという点において、音楽でのアウトリーチとの共通点を感じる一方で、対象者と一緒に作品を作りながら個々の表現や感性を惹き出すという点で、音楽の限界を感じるといった声もあがった。受講生が自分には何ができるのかを考えさせられる、良い機会となった。

2025年10月29日

ゲスト講師：丸山善生さん（事務部次長／総務課長）、畔柳さん（看護師長）、武藤さん、壁谷さん（総務課）（名城病院）

内容：名城病院について

本プロジェクトの実践先である名城病院の方々に、病院の概要や患者さんの症状についてレクチャーしていただいた。脊椎疾患の患者さんは車椅子に30分座っていることが辛い、といった現場の声を、普段から患者さんと接している看護師長さんから伺うことができたことは、企画作りにおいて非常に参考になった。後半では、受講生が企画のプレゼンテーションを行い、それに対するフィードバックをいただいた。

2025年11月19日

講義担当：石原慎先生（藤田医科大学医学部教授）

内容：藤田医科大学病院について

「病院」という場についての理解を深めるために例年実施する講座である。本プロジェクトの実践先の一つである、藤田医科大学で教鞭をとる石原先生より、藤田医科大学病院の理念と特色についてお話しいただき、同病院が重視する「ホスピタリティ」の概念について解説していただいた。

2025年11月26日

講義担当：佐藤直樹（本学美術学部教授／デザイン）

内容：音楽家のためのチラシ作成ワークショップ

アウトリーチに限らず、音楽家が自ら公演チラシを作成する際の基本的な手順や留意点をレクチャーした。「情報を集める、分ける」→「並べる、そろえる」→「調子をつける」というプロセスの原則や、余白の大切さ、フォントの重要性などを理解することができ、音楽の受講生にとって大変学びの多い時間となった。

2025年12月3日

ゲスト講師：馬場啓介さん（豊田西病院デイケア課／作業療法士）

内容：豊田西病院について

本プロジェクトの実践先である、豊田西病院で働く作業療法士さんより、精神科病院とはどのような場所かをレクチャーしていただいた。今年度より、外来患者さん向けだけでなく、入院患者さんに向けてコンサートをすることとなったため、それぞれの患者さんの症状や環境の違いなどを具体的に教えていただいた。患者さんの普段の過ごし方などを聞くことで、あらためて自分たちの企画が対象者にとってどのような影響をもたらすのか考えるきっかけをいただいた。

2026年1月7日

講義担当：神谷幸宏先生（愛知県立大学情報科学部教授／ICTテクノポリス研究所長）

内容：音楽聴衆時の感情・状態推定に関する研究について

昨年度に引き続き、神谷先生の専門分野（データ解析）と音楽との接点についてお話いただいた。また、本プロジェクトと神谷先生と共同で行っている「音楽聴衆時の感情・状態推定に関する研究」において、2025年に愛知県内の保育園で試験的に行った、聴衆時の生体信号を計測する実験の結果を共有していただいた。演奏を聴いている際の子どもたちの呼吸と集中に関連性があることや、年齢による反応の違いなど、実験内容や結果、考察に多くの受講生が興味を抱いていた。

2026年1月21日

講義担当：石川貴憲さん（サクソフォン奏者）

内容：福祉施設での演奏活動

長久手市文化の家フランチャイズアーティストとしての経験などをもとに、障害者施設、高齢者施設でのアウトリーチ活動について紹介し、演奏者のレパートリーと対象者のニーズの両方に合うプログラム作りのポイントを解説していただいた。実際に福祉施設で働きながら、音楽活動やアウトリーチ活動を行っている演奏者の目線からのお話は、大学院修了後の受講生の視野を広げることに繋がった。



2025年5月7日 授業の様子
スーパーバイザーによる講義



2025年5月28日 授業の様子
北保育園とZoomでの打ち合わせ



2025年6月4日 授業の様子
丹下聡子先生（フルート奏者／博士（音楽）／
保育士）による講義



2025年6月11日 授業の様子
企画会議の様子



2025年6月18日 授業の様子
6月23日実施チームのランスルー



2025年7月23日 授業の様子
7月24日実施チームのランスルー



2025年10月22日 授業の様子
佐藤文子先生（本学美術学部准教授／陶磁）
による講義



2025年11月19日 授業の様子
石原慎先生（藤田医科大学医学部教授）
による講義



2025年11月26日 授業の様子
プロジェクト副代表による講義



2026年1月7日 授業の様子
神谷幸宏先生（愛知県立大学情報科学部教授
／ICTテクノポリス研究所長）による講義



2026年1月21日 授業の様子
石川貴憲さん（サクソフォン奏者）による
講義



2026年1月28日 授業の様子
2月6日実施チームのランスルー

4. 東部保育園へのアウトリーチ実施

中村由加里

「病院アウトリーチプロジェクト」では、初年度から継続して尾張旭市立東部保育園でのアウトリーチを行っている。2025 年度は、1 チーム、受講生 3 名が 7 月 31 日に乳児、年少、年中、年長の 4 回にわたってアウトリーチを実施した。

日時 2025 年 7 月 31 日 (木)
10:00～10:15、10:20～10:40、10:45～11:05、11:10～11:30 (4 回公演)

ねらい 音楽が自己表現のひとつになり得るということを感じてもらう

出演者 山下菜々 (フルート)、加藤七帆 (コントラバス)、奥ノ坊悠 (ピアノ)

演奏曲 J. ドッド：ミッキーマウス・マーチ
F. プーランク：フルート・ソナタより第 3 楽章
M. ブルッフ：コル・ニドライ
F. ショパン：子犬のワルツ
L. v. ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第 14 番「月光」より第 1 楽章
W. A. モーツァルト：きらきら星変奏曲

メンター 中村由加里

評価者 中村由加里、安原雅之

評価者所感 普段、演奏者自身が感じている曲の雰囲気の違いを、福笑いのように表情を変えられる顔のパネルを使って示したことで、「曲と気持ちを繋ぐ」ことを子ども達に分かりやすく伝えることができた。全体を通して過度な演出はせずシンプルな構成であったが、子ども一人一人が音楽に合わせて自由に体を動かしたり、じっと聴き入ったり、それぞれのペースで音楽を感じる様子が印象的であった。



5. 北保育園へのアウトリーチ実施

佐藤杏奈

「病院アウトリーチプロジェクト」では、2023 年度から継続して武豊町立北保育園でのアウトリーチを行っている。今年度は7月22日に1チームがアウトリーチを実施し、対象年齢別に4回の公演を行った。

日時 2025年7月22日(火)

9:30～9:50、9:55～10:15、10:20～10:40、10:45～11:05(4回公演)

ねらい 音楽の3要素を元に、音楽の楽しみ方を知ってもらう

出演者 小野心音(ピアノ)、野々笑莉(サクソフォン)、田爪佑佳(パーカッション)

演奏曲 久石譲：さんぽ

R. シューマン：トロイメライ

P. ボノー：ワルツ形式によるカプリス

A. ゲラシメス：アスヴェンチュラス

M. ラヴェル：ポレロ

メンター 佐藤杏奈

評価者 七條めぐみ、佐藤杏奈

評価者所感 音楽を構成している3つの要素を元に、音楽の楽しみ方を伝えたい、というテーマが園児には少し難解ではあったが、可能な限り園児にも分かりやすく噛み砕いて伝えることができた。耳で聴くだけでなく、目で見ても楽しいと思えるような様々な工夫をしていたことや、最後まで園児のことを一生懸命考えていた真摯な姿が特に印象的であった。その姿勢が伝わるアウトリーチで、園児だけでなく保育士の方からもあたたかな反応をいただけた。



6. てとろ保育園へのアウトリーチ実施

倉橋祐佳里

昨年度に引き続き、てとろ北保育園（長久手市）、てとろ大永寺保育園（名古屋市守山区）でのアウトリーチを行った。今年度は6月23日、7月24日の計2日にわたり、それぞれの施設において1チームが対象年齢ごとに3回のアウトリーチを行なった。

① てとろ大永寺保育園（名古屋市守山区）

日時 2025年6月23日（月）10:00～11:20

10:00～10:20、10:30～10:50、11:00～11:20（3回公演）

ねらい 物語を通して、色々な楽器の魅力、音楽の楽しさを知ってもらう。

出演者 北川温子（ピアノ）、寺島はな（ヴィオラ）、山家隆司（トロンボーン）、佐伯昌恭（バリトン）

演奏曲 小さな世界

P. ヒンデミット：無伴奏ヴィオラ・ソナタ Op.25-1 第4楽章

F. ショパン：ノクターン第2番 変ホ長調 Op.9-2

E. クレスポ：インプロビゼーション第1番

F. シューベルト：音楽に寄せて

小さな世界

メンター 中村由加里

評価者 中村由加里、小山裕子

評価者所感 劇仕立てのアウトリーチであったが、学生の表情豊かな演技と生演奏の迫力で園児たちを引き込んだ。園児には馴染みのない曲も物語の中に入ることによって自然に聴くことができていた。乳児クラスでは登場人物の迫力を怖がったお子さんが泣いてしまうなどの反応もあったため、お話を少しアレンジしたり、時間を短くしたりするなどの対応も考えられる。衣装や小道具にも工夫があり、子供たちの楽しむ様子が見られた。



② てとろ北保育園（長久手市）

日時 2025年7月24日（木）10:00～11:20

10:00～10:20、10:30～10:50、11:00～11:20（3回公演）

ねらい クラシック音楽に出会い、新しい経験を楽しんでもらう。

出演者 畑こはる（ソプラノ）、武藤寧音（ピアノ）、門永希（ヴァイオリン）、佐伯昌恭（バリトン）

演奏曲 久石譲：さんぽ

J. オッフエンバック：天国と地獄

W. A. モーツァルト：オペラ《ドン・ジョヴァンニ》より〈お手をどうぞ〉

F. ショパン：練習曲 Op. 25-11 〈木枯らし〉

E. エルガー：愛の挨拶

W. A. モーツァルト：オペラ《魔笛》より〈パパパの二重唱〉

メンター 倉橋祐佳里

評価者 三木隆二郎、倉橋祐佳里

評価者所感 4名中3名が初めてアウトリーチを経験するメンバーだったため、企画の段階から戸惑いも見られたが、計3回の本番の中でブラッシュアップされ、最後の回では園児と対話する余裕も見られた。歌いながら登場したり、弾きながら園児の周りを回るといった演出があったが、スペースが狭かったり、歌声が届かないなどのハプニングもあり、当日の動線確認の重要性を学んだ。



7. 藤田医科大学病院へのアウトリーチ実施

佐藤杏奈

初年度から実施していた藤田医科大学病院での院内コンサートは、今年度も B 棟パサージュで開催することができた。さまざまな方が交差するパサージュでの演奏は、病院の空間に彩りを添えることができた。

① A チーム

日時 2026 年 2 月 6 日（金）10:00～10:45

ねらい バレエ音楽や親しみやすいメロディーを通して情景を思い浮かべながら楽しんでもらい、心が軽くなる時間を届ける

出演者 武藤寧音（ピアノ）、藤井彩乃（ピアノ）

演奏曲 P.チャイコフスキー：バレエ組曲《眠れる森の美女》Op.66a より〈ワルツ〉

M.モシュコフスキー：スペイン舞曲 Op.12-3

R.シューマン＝リスト：春の夜

F.クライスラー＝ラフマニノフ：愛の悲しみ

P.チャイコフスキー＝エシポワ：バレエ音楽《くるみ割り人形》Op.71a より

II 行進曲 III 金平糖の踊り VII 葦笛の踊り VIII 花のワルツ

メンター 佐藤杏奈

評価者 七條めぐみ、佐藤杏奈

評価者所感 病院でのアウトリーチを行うのが初めての 2 人だったが、落ち着いて演奏を届けられた。あまり目を見て話せなかった、と言っていたが、患者さんや医療従事者の方々が音に引き寄せられ、足を止めて演奏に聴き入る様子が見られた。病院の中でも人通りの多いパサージュという空間に、華やかな音楽が彩りを添えた。



② Bチーム

2月6日（金）の後半に演奏予定だったBチームは、出演者の体調不良により残念ながら公演延期とした。延期日程は3月26日（木）となった。

日時 2026年3月26日（金）10:00～10:45

ねらい 個々の強みを活かし、患者さんに様々な世界を共有しながら、心を休めていただく

出演者 瀬戸口祐也（バリトン）、山下菜々（フルート）、奥ノ坊悠（ピアノ）

演奏曲 加山雄三：君といつまでも

R.シューマン：ケルナーの詩による12の歌曲 第10曲〈静かなる涙〉

A.ピアソラ：《タンゴの歴史》より〈ボーデル1900〉

C.フランソワ：マイウェイ

岡野貞一：ふるさと

メンター 佐藤杏奈

※記載内容は3月4日時点のもの。プログラムは変更の可能性がある。

8. 豊田西病院へのアウトリーチ実施

倉橋祐佳里

今年度後期は、単科の精神科病院である豊田西病院で受講生 2 チームがアウトリーチを行った。例年に引き続いて外来の患者さんを対象にした多目的ホールでのコンサートを 1 月 30 日に、そして今年度初めての取り組みとして、入院患者さんを対象にした病棟内でのコンサートを 1 月 29 日に行なった。

① A チーム

日時 2026 年 1 月 29 日 (木) 13:30~14:30

会場 個人 OT 室

ねらい 普段あまり触れる機会のないジャンルの音楽を聴いて、素敵な気持ちになってもらう。

出演者 緒方優月 (ピアノ)、堀川愛夏 (ピアノ)

演奏曲 E. グリーグ：《ペールギュント組曲》より 〈朝〉

P. チャイコフスキー：《くるみ割り人形》より 〈行進曲〉〈金平糖の精の踊り〉〈トレパーク〉〈花のワルツ〉

ディズニーメドレー (パート・オブ・ユア・ワールド~彼こそが海賊~ホール・ニュー・ワールド)

中島みゆき：糸

J. シュトラウス 1 世：ラデツキー行進曲

メンター 倉橋祐佳里

評価者 七條めぐみ、倉橋祐佳里

評価者所感 初めての病棟内でのコンサートであったため、事前に病院職員さんと入念な打ち合わせを行った。当日は出演者 2 名のやわらかな雰囲気や笑顔もあり、入院患者さんもリラックスして聴くことができているように思う。予想していたよりも多くの入院患者さんにご来場いただき、また途中退室をすることなく聴く方が多かったことは、病院職員さんたちにとっても驚きであったようだ。改めて音楽の持つ力を強く感じる機会となった。



② B チーム

日時 2026年1月30日(金) 10:00~11:00

会場 多目的ホール

ねらい 心踊るひとときを、音楽とともに

出演者 奥ノ坊悠(ピアノ)、山家隆司(トロンボーン)、野々笑莉(サクソ)

演奏曲 E. エルガー：愛の挨拶

F. ブルグミュラー：貴婦人の乗馬

M. ブルッフ：ロマンス へ長調 Op.85

A. ハチャトゥリアン：剣の舞

中村八大：上を向いて歩こう

L. バーンスタイン：《ウエスト・サイド・ストーリー》メドレー(山家隆司編曲)

いずみたく：見上げてごらん夜の星を

メンター 倉橋祐佳里

評価者 安原雅之、倉橋祐佳里

評価者所感 MC中に自分が楽器に出会ったきっかけを盛り込むことで、患者さんの興味をひいていた。一方で、エピソードを話すとMCが長くなってしまうため、演奏とのバランスを取ることが課題として挙げられた。立候補のあった患者さんにトロンボーンのスライドの動きを体験してもらうコーナーでは、後日「前からずっとトロンボーンが気になっていた。難しかったけれど本当に楽しかった」との感想をいただいた。



9. 名城病院へのアウトリーチ実施

中村由加里

今年度は、2019年の病院ロビーでのコンサート実施後、コロナ禍によって継続が困難となった名城病院でのアウトリーチを再開することとなった。院内の改装によりロビーでの実施は難しかったが、場所を地下の会議室に移したことで、車椅子の患者さんも参加しやすい環境となり、多くの入院患者さんに音楽を届けることができた。

日時 2026年2月3日（火）15:00～15:45

会場 地下大会議室

ねらい 患者さんがイメージしやすい身近なテーマの曲を通して、癒しと希望を届ける

出演者 佐伯昌恭（バリトン）、畑こはる（ソプラノ）、小野心音（ピアノ）

演奏曲 F. ショパン：ワルツ第4番 Op. 34-3

G. ロッシーニ（伝）：猫の二重唱

越谷達之助：初恋／中田喜直：木兎

F. ショパン：マズルカ第15番 Op. 24-2

武満徹：○と△の歌／武満徹：小さな空

坂本九：上を向いて歩こう

メンター 中村由加里

評価者 安原雅之、中村由加里

評価者所感 懐かしさと呼び起こすような選曲に、患者さんだけでなく、医療従事者のみなさんも涙を拭う様子が見られた。その一方で、もう少し患者さんに親しみのある曲や歌詞の分かりやすい曲を入れたほうが良かったのではという声もあがった。患者さんとのコミュニケーションをとることで、双方の距離を近づけることができたかもしれない。



10. アール・ブリュット

安原雅之・石川貴憲

(1) 概要

“アール・ブリュット”とは、画家ジャン・デュビュッフェ Jean Dubuffet(1901-1985)によって考案された用語で、「生の芸術」を意味する。この用語が示すものには、アカデミックな教育を受けずに創作活動を行っている人たちの作品などが含まれるが、近年では、障害者によるアートの代名詞ともなっている。

あいちアール・ブリュットは、「愛知県内の障害のある人の芸術・文化活動を通じて、障害のある方の社会参加と障害への理解が深まり、障害の有無をこえた交流が広がることを目指す活動」（あいちアール・ブリュットのウェブサイトより <http://www.aichi-artbrut.jp>）であり、2014年以降、「あいちアール・ブリュット展」が開催されている。

2025年度には、「あいちアール・ブリュット障害者アーツ展」の期間中に舞台企画のひとつとして「愛知県立芸術大学によるクラシックコンサート」を開催し、また、関連企画として4つの福祉施設における出前コンサートを実践した。いずれも、「病院アウトリーチプロジェクト」がコーディネートを担当した。

(2) あいちアール・ブリュット障害者アーツ展

①メインコンサート

愛知県立芸術大学は、愛知県障害者芸術活動参加促進事業実行委員会からの受託事業として愛知県福祉局福祉部障害福祉課と連携し、あいちアール・ブリュット障害者アーツ展での演奏企画、および福祉施設でのコンサートを実施している。

2025年度は、メインコンサートとして、9月12日（金）に「愛知県立芸術大学によるコンサート」を名古屋市東文化小劇場で開催した。このコンサートは、障害のある方、その親族・支援者などすべての方を対象としたもので、普段はコンサートに行くことを遠慮してしまう方も気軽に本格的な音楽を楽しんでいただけるように配慮し、プログラムが組まれた。開催概要は以下の通りである。

「愛知県立芸術大学によるクラシックコンサート」

日時 2025年9月12日（金）13:00～14:00

会場 名古屋市東文化小劇場

出演者 Cocorone こころね 中村由加里（クラリネット）、永田佳暖（ソプラノ）、服部響子（ピアノ）

演奏曲 R. ロジャース：ドレミの歌

フランス民謡：クラリネットを壊しちゃった

R. ロジャース：サウンド・オブ・ミュージック

R. ロジャース：私のお気に入り

S. ラフマニノフ：道化師

伊藤美由紀：路傍の道化

石原勇太郎：銀鼠の道化

R. ロジャース：ひとりぼっちの羊飼

F. シューベルト：岩の上の羊飼

R. ロジャース：さよなら、ごきげんよう

F. ロウ：踊り明かそう

演奏者所感

『サウンド・オブ・ミュージック』の挿入歌を基盤に、それぞれのソロ曲を挟みながら、この編成のために書かれたシューベルトの〈岩の上の羊飼〉を堪能していただくプログラムを考えた。様々な役割のスタッフの皆さんのサポートによって、お客さんが参加しやすい環境が整い、演奏に反応して声を出す人や、アンコールで自然に踊り出す人もいた。演奏者として、会場全体が音楽でつながる空間の心地よさや楽しさを身近に体感することができた。(中村由加里)



②福祉施設でのコンサート

愛知県障害者芸術活動参加促進事業実行委員会からの受託事業費を始め、愛芸アシスト基金及び大学運営費交付金によって実施している。

◆社会福祉法人恩賜財団愛知県同胞援護会障害者支援施設 サンホーム豊田

日時 2025年12月21日(日) 13:45~14:30

出演者 中村まり(フルート)、井澤莉子(フルート)、岡田薫子(フルート)、佐久川璃子(フルート)

演奏曲 W. A. モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク
 E. グリーグ：《ペール・ギュント》第1組曲 Op. 46より第1、3、4曲
 久石譲：となりのトトロ・メドレー
 P. I. チャイコフスキー：《くるみ割り人形》より〈葦笛の踊り〉〈花のワルツ〉
 〈金平糖の踊り〉
 山下達郎：クリスマス・イブ
 クリスマスソング・メドレー

演奏者所感 クリスマスシーズンの演奏会であったため、クリスマスにちなんだ曲を多めに取り入れた。なかでも、施設の音楽クラブで歌ったことがあるとお聞きした《クリスマス・イブ》や、クリスマスソング・メドレーでは、一緒に口ずさんだり、手拍子をして頂いたり、利用者さん達と交流しながら演奏会を進めることができた。



◆社会福祉法人ひまわり福祉会障害者支援施設 杜の家

日時 2026年1月14日(水) 13:30~14:15

出演者 永田佳暖(声楽)、三島加蓮(ピアノ)

演奏曲 R. ロジャース：ドレミの歌

広瀬香美：ロマンスの神様

miwa furuse：道

中田喜直：はなやぐ朝に

F. サイ：ジャズ風トルコ行進曲

A. ラインマン：へびがしんじゃった

アメリカ民謡：幸せなら手をたたこう

なかにしあかね：今日もひとつ

槇原敬之：世界にひとつだけの花

演奏者所感

リクエスト曲に加え、シェアード・ゴールを踏まえて選曲した専門性の高い楽曲や、利

利用者さん・職員さんとともに会場全体で即興的なセッションを行うなど、多様なプログラムを取り入れた。皆さんが身体全体で音楽を楽しんでいる様子を間近で感じることができた。



◆社会福祉法人 ひかり学園

日時 2026年1月15日(木) 13:30~14:00

出演者 高橋喜仁(トロンボーン)、関口詩織(ピアノ)

演奏曲 H. アーレン:虹の彼方に

I. ストラヴィンスキー:《プルチネラ組曲》より〈ヴィーヴォ〉

F. リスト:ラ・カンパネラ

S. ラフマニノフ:祈り

中村八大:上を向いて歩こう

演奏者所感

特にラフマニノフや《ラ・カンパネラ》の演奏で利用者の皆さまが静かに集中して耳を傾けてくださり、音楽そのものの魅力が深く届いているように感じ大変嬉しかった。また、職員の方々の温かく丁寧なサポートのおかげで、終始安心して演奏することができ、非常に充実した時間となった。



◆社会福祉法人愛知県厚生事業団 愛厚はなのきの里

日時 2026年1月30日(金) 14:00~14:45

出演者 小谷由里香(ユーフォニアム)、狩集歩華(マリンバ)

演奏曲 V. ユーマンス: キャリオカ

C. ドビュッシー: 亜麻色の髪の乙女

H. マンシーニ: ムーン・リバー

アメリカ民謡: 幸せなら手をたたこう

黒須克彦: 夢を叶えてドラえもん

加藤大輝: Elegy

岡野貞一: ふるさと

岡田実音: ハピネス

演奏者所感

クラシックの名曲や施設からのリクエスト曲、マリンバとユーフォニアムのためのオリジナル作品からプログラムを構成した。利用者の方々による「ずっこけバンド」との共演は大いに盛り上がり、他の利用者の皆様も手拍子や体を揺らしながら聞いてくださり、心から楽しんでいただける様子に、私たちにとっても大きな励みとなる公演になった。



11. 「四国子どもとおとなの医療センター」見学報告

七條めぐみ

「病院アウトリーチプロジェクト」は 2025 年度、香川県善通寺市にある「四国子どもとおとなの医療センター」を見学した。本プロジェクトでは 2018 年度に、山口大学の中野良寿先生（当時）をお招きし、同医療センターの芸術に関する取り組みについて紹介していただいた。当時から実際に現地へ足を運んでみたいと願いつつ、その後コロナ禍となり、プロジェクトの予算削減もあり実現に至っていなかった。今年度になり、シキシマ学術・文化振興財団さまの研究助成をいただけたことで、医療におけるアート（ホスピタルアート）の先行事例を学ぶ目的で、医療センターを訪問することができた。折しも、見学を希望する団体のために「見学ツアー」が開催されたため、そのツアーに参加した。本稿では見学ツアーの概要、四国子どもとおとなの医療センターのホスピタルアートについて、院内見学、座談会の様子と所感をまとめる。

1. 見学ツアーの概要

日時 2025 年 8 月 21 日（木）13:30～17:00

場所 四国子どもとおとなの医療センター 4 階こもればいホール

参加者 愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」ほか 全 4 団体

本プロジェクトからは、筆者とコーディネーターの中村、倉橋が参加した。

全体の内容は以下の通りであった。

- ・院長挨拶（院長 前田和寿氏）
- ・参加団体の代表者挨拶
- ・ホスピタルアートの紹介（アートディレクター 森合音氏）
- ・院内見学
- ・実践報告（アートコミュニケーター 井上由季子氏、ホスピタルガーデナー 山口智恵子氏）
- ・座談会（参加団体からの質疑応答）
- ・アートワークショップ体験

2. 四国子どもとおとなの医療センターのホスピタルアートについて

見学ツアーではまず、医療センターの「アートディレクター」である森合音氏から、ホスピタルアートの取り組みについて説明があった。森氏は、17 年前から医療センターに関わり、現在では NPO 法人アーツプロジェクトの代表も務める。同氏によると、四国子どもとおとなの医療センターでは、アートを長期的な視点で取り組む問題解決の

方法と位置付け、アートを介することで医療者と表現者（患者、職員など）が対等に話し、想いを形にすることができるとのことだ。アートを取り入れる効果としては、誰かと共につくる、対話をする、時間をかけるといった過程を経ることで、病院への愛着形成、患者の心の落ち着き、病院の個性などが得られるという。印象的だったのは、病院内の困りごとやニーズを「痛み」ととらえ、それを出発点としてアートによる課題解決方法を考えていることである。例えば、院内の壁には数多くのくぼみ（「ニッチ」と呼ばれる）が作られ、扉を開けると小さなプレゼントを受け取ることができる（写真1）。これは、児童精神科の患者が抱える「つながりたいけどつながりたくない」という気持ちを起点に考え出されたもので、匿名の相手とのプレゼントのやり取りにより、軽やかなコミュニケーションが生まれるというものだ。同時に、プレゼントを贈る側には、「誰かの役に立てることがある」という自信にもつながるといふ。

3. 院内見学

つづいて、参加者が3グループに分かれて、院内見学を行った。見学したのは、カフェ、屋上庭園、ボランティア室の3か所である。

病院に併設されるカフェ「イナホ珈琲」では、木目調の明るい店内に、壁にはさまざまな模様をしたマグカップ型の切り抜きが貼られている（写真2）。これは、作り手が好きなもの（人の顔、風景、食べ物など）を雑誌や本から選んで作成したもので、作り手の愛着と、多種多様なマグカップが並ぶという視覚的なおもしろさを生んでいる。このカフェの入口はギャラリーも兼ねており、アートボランティアによる作品が展示され、購入できるようになっている。作品の価格は、芸術それ単体だけでなく、芸術をはぐくむ土壌や環境を重視する「アール・テロワール」の考え方にに基づき、50%が作家に、30%が病院に、20%がカフェに還元されるとのことである。

屋上庭園は、ホスピタルガーデナーの山口智恵子氏を主軸に運営されている。全体的に視界が広く、庭園の緑とともに、善通寺の街並みや香川の山々を間近に感じられる空間である（写真3）。種の手配やベンチの修理などは地域の方の協力によって成り立っており、芝刈りや水やりを医療従事者が行うこともあるという。菜園スペースには季節の野菜が植えられ、その収穫は外出が困難な入院患者さんにとっては、遠足代わりにイベントにもなっている。屋根を設置することができない代わりに、患者さんが描いた絵を素材とするパラソルを常備し、散策の際に雨や日差しを避けられる工夫がなされている。

ボランティア室は、ボランティアからのアート作品が届けられ、院内の様々な場所に届けられる際の拠点である。同時に、患者さんや病院職員が自由に訪問し、時間を過ごすことのできる場でもある。アートディレクターの森氏は、あえて「アートディレクター室」ではなく「ボランティア室」を名乗ることで、この空間が院内における「余白」として存在することを重視しているという。そのコンセプトを反映するかのよう、室

内には届けられた作品の他にも色鉛筆、おもちゃ、木のオブジェなど雑多なものが置かれ、訪れた人が緊張しない空間づくりが心掛けられていた（写真4）。

これら3か所において共通する概念は「循環」である。いずれも、病院で過ごす人々が行き交い、オンとオフを切り替える場所となっている。カフェでは、アート作品を介した経済の循環があり、庭園では種を植えて植物を育て、また種を取るという生命の循環、そしてボランティア室ではアート作品の循環が成り立っている。この3か所の見学を通じて、四国こどもとおとなの医療センターのホスピタルアートは、必ずしも大掛かりなアート作品を導入するのではなく、院内の日常を少しずつ豊かにすることによって成立していることが感じられた。

4. 座談会

座談会では、各参加団体からの質問に対して、院側の代表者（前田和寿院長、看護部長・樋口智津氏、育児対策支援室長・木下あゆみ氏、児童精神科看護師長・松木喜与氏、管理課長・小早川儀雅氏、アートディレクター・森合音氏）が応答する形で行われた。主なやり取りを挙げると、ホスピタルアートを支えるための組織づくりに関する質問に対しては、アートにおける自由なひらめきを可能にするために、トップダウンでもボトムアップだけでもなく、「共存共栄」でアート活動を行っている、という回答があった。別の質問においても、「アートは対等なコミュニケーションのツール」であるという発言があり、医療者と患者という非対称性が強い環境だからこそ、対等でいられる場としてのアートが重んじられていると感じた。また、アート活動に関わる費用についての質問では、公的な補助金は一切なしで運営しているとの回答があった。その他、本プロジェクトに関わる内容として、美術分野だけでなく音楽分野の取り組みに関する質問では、ヴァイオリン奏者が来院して音楽を届ける活動を10年以上続けている。ふるさとの曲をプレゼントするなど、生のやり取りが発生する対話型のコミュニケーションを大事にしている、という回答があった。

5. 見学を終えての所感

病院見学ツアーを通じて、四国こどもとおとなの医療センターの院長をはじめとする医療従事者や、アート活動を支えるスタッフの中に「アートは対等なコミュニケーションの手段」であり「課題解決のツール」であるという共通理解があることを強く感じた。芸術表現の当事者にとって、アートは身近で重要なものである一方で、社会的な価値を認識することは少ない。ましてや、芸術を専門としない人々にとっては「難しい」「時間の無駄」「価値がない」と片付けられがちである。アートを問題解決の手法と見なし、価値を置く医療センターの姿勢は、芸術家にとって福音であると同時に、それを育む芸術大学にとっても指針になると感じた。

また、ホスピタルアートの運営には予算面や組織づくりでの秘策があるというより、

関わる人々の意思と行動によって活動が支えられていることも印象的であった。本プロジェクトの行うアウトリーチはボランティアではなく、演奏者や指導者への謝金を病院や保育園からいただいて行うものであることから、医療センターと同じ仕組みで運営することは難しい。ただし、「自己表現（アート）を通じて目の前の相手を幸せにする」という理念は芸術家にとっても目指すべきものであり、アウトリーチに携わる者の意識として学ぶことは大きい。今回の事例は、愛知県立芸術大学が地域社会への貢献を目指す際に、さまざまな施設やその関係者、ひいては地域社会を巻き込みながら対等な関係性を築いていくための、重要な示唆となったと考える。

参考ウェブサイト：四国こどもとおとなの医療センター ホスピタルアート紹介ページ
<https://shikoku-mc.hosp.go.jp/hospitalart/index.html>



写真1：院内の壁に設けられた「ニッチ」



写真2：カフェの厨房とマグカップの壁紙



写真3：屋上庭園



写真4：ボランティア室

12. 保育園での実験報告

七條めぐみ

「病院アウトリーチプロジェクト」は 2025 年度より、愛知県立大学情報科学部の神谷幸宏教授と共同で「音楽聴取時の感情・状態推定に関する研究」を行っている¹。この研究は、音楽の生演奏を聴いた時の生体信号を、非接触センサを用いて計測することにより、聴取者の快-不快、集中-ぼんやりといった心身の状態を推定するものである。これを応用することで、保育や介護などの現場において、自身の状態を言語で表現しがたい方々がどのように感じているのか、客観的な指標を得られることが期待される。また、「病院アウトリーチプロジェクト」にとっては、病院や福祉施設へのアウトリーチ活動の評価（効果測定）に応用できると考えられる。

2025 年度には試験的に、愛知県内の保育園児に対して、「病院アウトリーチプロジェクト」のスタッフが音楽を演奏し、聴取時の生体信号を計測する実験を行った。本稿では、実験の概要と今後の予定をまとめる²。

実験の概要

時期 2025 年 9 月

場所 愛知県内の保育園

対象者 1~2 歳児 4 名、3~5 歳児 4 名（計 2 回実施）

方法 ドップラーセンサを仕込んだぬいぐるみを対象者に抱いてもらい、呼吸を計測しながら楽器の生演奏を聴いてもらう。計測した呼吸は一般的なフーリエ解析とともに「ARS 解析」³を行った。

演奏者 「病院アウトリーチプロジェクト」スタッフ 3 名（中村、倉橋、佐藤）

演奏楽器 クラリネット、サクソフォーン、ピアノ

演奏曲 A. ガーシュウィン：《サマータイム》、B. パッヘルベル：《カノン》、C. 三木たかし：《アンパンマンのマーチ》

¹ 本研究に先立ち、神谷先生とは 2020 年度にも非接触センサによる感情推定の実験を行い、以降定期的に授業で「データ解析と音楽」に関する講義を実施していただいている。

² 本稿とは別に、『ミクスト・ミュージック』（愛知県立芸術大学音楽学コース紀要）第 21 号（2026 年 3 月発行）に研究報告を掲載したため、併せて参照されたい（七條めぐみ『音楽聴取時の感情・状態推定に関する研究』報告—実験曲の選定に関する課題』『ミクスト・ミュージック』第 21 号：58-68）。

³ ARS 解析は愛知県立大学で開発された独自手法である。この手法は、フーリエ解析が苦手とする低周波数領域で高い時間・周波数解像度を得られる。センサで取得した呼吸のデータの周波数も低いため、この手法の適用を試みる。

演奏曲目を選定する前提として、被験者である保育園児が聴くのに差し支えない、それぞれ数分程度の長さに収まることを考慮した。その上で、各曲の選定基準は以下のとおりである。

- A. 園児が聴きなじみがなく、暗い調子で拍節感のあいまいな曲
- B. テンポが一定で落ち着いた調子の、旋律を聞き取りやすい曲
- C. 園児が聴きなじみがあり、明るい曲

実験では、演奏の前に安静時の呼吸を測定し、実験曲を A～C の順に演奏しながら測定を続けた。測定開始から演奏終了までの時間は各回 15 分程度であった。実施にあたっては、愛知県立芸術大学の倫理審査委員会で内容や方法に問題がないかを審議し、対象者には保育園を通じて事前に実験内容を説明した上で、保護者から参加の同意書をいただいた。

実験で得られたデータとその解析結果については、「病院アウトリーチプロジェクト」の授業内で愛知県立大学・神谷教授よりご報告いただき、後日、保育園にも報告に伺った。今後は、情報科学分野での成果発表を行うとともに、さらなる対照実験を行うことで、生演奏視聴時の身体の状態について解明を進めたい。また、将来的にはアウトリーチ活動の効果測定にも応用することが目標である。

振り返り

1. 「病院アウトリーチプロジェクト」9年度目の振り返り

スーパーバイザー 三木隆二郎

2017年度より始められた当プロジェクトの授業では、前期に保育園でアウトリーチ初体験をしてから、後期に病院で患者/医療従事者の前で演奏することにより、良質な「病院アウトリーチ」を作り上げる過程を体験的に実践で身につけるといった構成となっている。

今年度の保育園では毎年行っている尾張旭市の東部保育園と、一昨年から訪問を始めた武豊北保育園の他に二つの保育園で演奏することで合計4回のアウトリーチを実施した。

また病院では提携関係にある藤田医科大学病院や毎年伺う豊田西病院、さらに6年前に一度だけお邪魔した名城病院でも今年は演奏し、合計4回のアウトリーチを実施した。

(1) 上期の教育内容の振り返り

スーパーバイザーとして行った5月の座学では、『TAN アウトリーチ・ハンドブック』の演奏家インタビューを受講生が読んで気になった気づきを書き出すという課題を議論した上で、授業では第一線音楽家が考えるアウトリーチとは何か、またNPO トリトン・アーツ・ネットワーク (TAN) の事例を通して保育園アウトリーチの留意点を解説した。

前期の院生14名の内訳は、鍵盤楽器4名、弦楽器3名（ヴァイオリン1、ヴィオラ1、コントラバス1）、管打楽器4名（トロンボーン1、フルート1、サクソ1、パーカッション1）、声楽3名（ソプラノ1、バリトン2）であった。

アウトリーチでは、受入先と共通目標 (Shared Goal) を設定した上で実践では瞬時に聴き手の心をつかみ (Entry Point) 最後まで集中してもらおう時間を作り出すことが大事である。

本プロジェクトでは通常と異なる室内楽編成で臨む。創意工夫で構成や選曲を考え、進行することが求められる。その為、各チームとも企画を練り上げるのに大変苦勞をす

る。前期のあるグループはフルート、コントラバス、ピアノという編成だった。顔の表情を変えられるボードを園児の前に置いて「こんな気持ちで演奏するから聴いてね」と言

って演奏した後に、次の曲では演奏後に「今の曲を聴いてどんな顔だったかな？」と園児に問いかけて、手を挙げた園児に実際に表情を作らせる試みをしていた。

またパーカッション、サクソ、ピアノでは「リズムちゃん」「メロディちゃん」「わおんちゃん」がポレロを演奏することで音楽の三要素を園児に分かり易く体感させた。

さらにソプラノ、バリトン、ピアノ、ヴァイオリンではオープニングでヴァイオリン奏者が園児の後ろから入って周りをまわったり、園児と視線を合わせるために歌手2名がオペラのアリアを跪いて歌う工夫が見られた。

別のバリトン、ピアノ、ヴィオラ、トロンボーンでは、集中して聴き入ってもらうために、歌手がスーパーマンになって登場し、芝居仕立てで演奏することで、子どもたちが興味を持って演奏に向き合えるよう工夫をしていた。

(2) 下期の教育内容の振り返り

スーパーバイザーの講義では「医療福祉施設でのアウトリーチについて」及び「アーティストでも知っておかなければいけない社会保障」と題してレクチャーを行った。

病院アウトリーチでも病院との Shared Goal を打ち立てたうえで、その共通の目標を達成するために最適な Entry Point を考案して、演奏を開始したと同時に聴き手の心を惹きつけることが肝要である。

後期の院生 14 名の内訳は、鍵盤楽器 7 名、管打楽器 4 名（トロンボーン 1、フルート 1、サクソ 1、パーカッション 1）弦楽器 0 名、声楽 3 名（ソプラノ 1、バリトン 2）で、以下の 4 回のアウトリーチの実践計画を立てたが 3 回になった。

藤田医科大学病院では 1、2 階が吹き抜けの交差路のようなパサージュという、医療従事者や患者が行きかう場所で演奏した。また例年何う豊田西病院では通院・外来患者向けに加えて今回初めて、入院病棟内で入院患者だけのために演奏を行った。さらに 6 年前に一度だけお邪魔した名城病院でも会議室で演奏をすることが出来た。

豊田西病院の最初のグループは今回初めて入院患者のみを対象とした病棟内でのピアノ連弾の演奏だった。奏者は後期から受講した二人だったが MC ではゆっくり話すことに努め、落ち着いて進行していた。曲の構成もグリーグの朝から始めて、くるみ割り人形やディズニーで夢の世界へいざない、中島みゆきの糸では感謝の気持ちを込めて演奏するという流れで安定した運びだった。

同病院向けのもう一つのグループはトロンボーン、サクソにピアノという編成で「心安らぐ時を」という Shared Goal だった。愛の挨拶から始めて各奏者の楽器との出会いを自己紹介で話したうえで、トロンボーンでは手を挙げた聴き手が前に出てきてスライドを実際に動かすという楽器体験コーナーが一体感を作り出すことに役だっていた。

名城病院には久方ぶりの訪問だったが、演奏場所が会議室で天井も低く患者と医療従

事者とでかなり密な状況だった。Entry Point として、冒頭で本学教授によるアウトリーチの説明を手短にした後「演奏する曲は何の動物を表現しているか三択で」というクイズ形式にしたことで、聴き手が初めて聴く曲の「聴き方ガイド」として音楽の世界に聴き手を引き込む効果があった。また「癒やしと希望を届ける」という Shared Goal に沿う選曲で MC でもその曲を選んだ背景を説明していた。

藤田医科大学病院でピアノ連弾を演奏したうちの一人は前期の保育園アウトリーチを経験していなかった。聴き手と双方向で演奏会を作っていくという点では、予め用意した MC 原稿をタブレットで読みながらのミニコンサートになったのが多少残念ではあったが、踊りの音楽を中心に情景が目浮かぶ選曲で、患者/付添い家族/医療従事者/通りすがりの方など様々な人が行きかうパサージュという場の特性を踏まえたアウトリーチになっていた。

ただ、もう一グループが体調不良者が出て直前のキャンセルになり、何とか年度内に予定を組み直し実施したものの、病院に迷惑をかけたことは今後の課題といえよう。

振り返り

2. メンターとしての振り返り

中村由加里・倉橋祐佳里・佐藤杏奈

近年は安定して多くの学生が受講しており、受講理由の中には、本プロジェクトを履修した先輩からの後押しによるものも見受けられる。こうした点からも、本プロジェクトが学生にとって有意義な学びの機会となっていることを実感している。

今年度前期は、受講2年目の学生をリーダーに据えてチーム編成を行った。リーダーを中心にチームごとで意見を交わしながら、それぞれがオリジナリティに富んだアウトリーチプログラムを企画した。また、他チームのランスルーを見ることで新たな視点を得て、意欲を高める学生の姿も見られた。実践では、保育園児の素直な反応に戸惑う場面もあったが、各チームが工夫を重ね、最後までやり切った。

初対面のメンバーで構成されたチームも多かったが、企画段階で互いを理解し、時間をかけてプログラムを練ることで、チームとしての結束が深まっていったように思われる。実践終了後も、同じチームで外部のアウトリーチ活動や演奏活動に取り組む学生の姿が見られ、学生同士の継続的な活動につながっていることがうかがえた。

後期の病院でのアウトリーチでは、年齢や背景が多様な対象者を想定する必要があったため、前期以上に対象者理解が求められた。企画段階から苦戦する様子も見受けられたが、実践では緊張しながらも対象者に寄り添おうとする姿や、予定とは異なる出来事が起きた際に柔軟に対応する姿が見られた。特に2年目の学生については、初年度の経験を踏まえた落ち着きがあり、その場の状況を把握しながら進める力を感じた。これは、アウトリーチにおいて重要な能力であり、経験の積み重ねによる成果の一つであるといえる。

その一方で、活動に慣れたことにより、企画段階における検討や問いかけがやや表面的になっていると感じられる場面もあった。アウトリーチは、回数を重ねることで円滑に進められるようになる反面、その都度異なる対象や状況に向き合い続ける姿勢が求められる。2年目の学生にとっては、経験をもとに行動できる段階にあるからこそ、「なぜこの内容を行うのか」「この場で音楽はどのような役割を果たしているのか」といった問いを、改めて自分自身に投げかけることが、今後の学びをより深めることにつながると考えられる。

また、実践後のアンケートからは、自身の想定と対象者の反応との間に差を感じ、戸惑いを示す学生の声も見られた。自身の専門性と対象者との接点のを見つけ方や、音楽的価値観の相違は、卒業後も考え続けていく課題であると考えられる。その意味でも、学

生である今、このような経験を積むことができたことは、演奏家がアウトリーチに関わる意義を考える良いきっかけとなったのではないだろうか。

アウトリーチに明確な正解はない。本プロジェクトにおいて、成功体験だけでなく、戸惑いや違和感を伴いながら試行錯誤する過程こそが、学生にとって重要な学びとなっていると感じている。
(中村由加里)

今年度もアウトリーチに興味を持つたくさんの学生が授業を受講し、工夫を凝らしたアウトリーチプログラムを作成した。前期は声楽、管打楽器、弦楽器、鍵盤楽器と多岐にわたる専攻からの受講があった一方で、後期は鍵盤楽器からの受講が非常に多かった。前期の保育園でのアウトリーチでは、昨年に続いて二年目を受講している学生の成長が著しく、後輩となる一年目の学生を企画、本番含めリードしている姿が印象的だった。また、一年目の学生も本番の一日の中で回を重ねるごとに良くなる様子が見られ、現場で経験することの重要性を強く感じた。後期に伺った豊田西病院では、何年も部屋から出ていない入院患者さんが音を聴きに出てこられたりと、音楽の持つ力を強く感じる機会となった。一方で音が鳴るとすぐに退室される患者さんもあり、チケットを買ってコンサートに来ることとは違った、受け手の趣味や興味の多様さを感じた。この受け手の多様さこそがアウトリーチの奥深さであり、より良いアウトリーチにするために我々演奏家が考え続けていくべきテーマだとも感じている。

また今年度は愛知県立大学の神谷幸宏先生との実験、四国こどもとおとなの医療センターの視察など、プロジェクトとしても新たな取り組みを行なうことができた。どちらも今後に繋がっていく取り組みであり、個人としても学んだこと、経験したことをプロジェクトに還元できるよう、尽力していきたい。
(倉橋祐佳里)

今年度もプロジェクトを通してたくさんの新しい出会いがあり、学びの多い充実した一年であった。前期は昨年度に引き続き武豊町北保育園に伺い、クラス別に4回公演をさせていただいた。メンバーの3人はアウトリーチを初めて経験したメンバーで緊張感もあったが、疲れを見せることなく最後まで真摯に子どもたちに向き合い、やり遂げた。後期には、藤田医科大学病院で2チームが演奏を届けた。企画の時間が限られている中でなかなかメンバーが揃わずに苦戦したが、2チームとも少しずつイメージが明確になったことにより、プログラムが形になったように感じている。

また、私自身がアウトリーチを実施する機会にも恵まれたことで、自分の経験値も少しずつ上がっているように感じている。日本へ来て間もない小学生～中学生が通う日本語支援施設であったり、教育支援センター、高齢者施設にも伺い、これまでのアウトリーチとはまた違った角度から、プログラムを考える経験をさせていただいた。

このように自らが経験し、考えるプロセスを大切にしてきたことは、授業の中でとても活きている。

メンターとして未熟な部分も多いが、それでも人とアンサンブルをする時のように、メンバーのことを知り、訪問先のことを知り、自ら歩み寄る姿勢を忘れないこと、そして考えることを辞めないことが大切だと感じた。このプロジェクトがあったからこそ、社会と音楽、そして自分について考えることができた。プロジェクトを立ち上げてくださった先生方に心から感謝したい。

(佐藤杏奈)

振り返り

3. 受講生の振り返り

2025年度はのべ18名の大学院生が「アート・マネジメント」の授業を受講した（前期のみ、後期のみの履修も含む）。以下に、受講生からの振り返りコメントを掲載する。

◎前・後期通じての受講生

今年度の病院アウトリーチでは名城病院へ訪問いたしました。去年からこのアウトリーチ・プロジェクトに携わらせていただいて、初めて歌とピアノという編成でアウトリーチに取り組むことができました。しかし、個人的にはありますが、いわば王道と思えるような編成なだけあって、管楽器の人と一緒に取り組むよりも難しいなと思ったことはありました。

プログラムは日本語を中心として、聞き手の方に癒しや希望をお届けすることを目的に組みました。コンサート後にお客さまからのアンケートを拝見し、お褒めの言葉もありましたが、「もう少しみんなが楽しめる曲を聞きたかった」とのお言葉もいくつかいただき、アウトリーチに取り組む上で何を重視すべきか、もう少し深く考えてみようとも感じました。（声楽領域2年 佐伯昌恭）

後期授業では、病院アウトリーチに取り組み、打楽器、ピアノ、フルート、バリトンの4名で演奏を行いました。異なる楽器編成で臨むアウトリーチは、それぞれの個性や専門性を活かしながら、同時に一つの統一された想いを聴き手に届ける必要があります。そのバランスの難しさを強く感じました。特に病院という空間では、演奏技術だけでなく、音量やテンポ、選曲、曲間の雰囲気づくりなど、聴き手の体調や心理状態への細やかな配慮が求められます。その中で、自分の表現を前面に出すのではなく、全体の流れや目的を意識し、音楽そのものが自然に届くよう心がける姿勢の重要性を学びました。また、事前の話し合いやリハーサルを通して、演奏に込めたい意図や方向性を共有することが、本番での安心感や音楽の一体感につながることも実感しました。今回のアウトリーチを通して、音楽は自己表現であると同時に、相手に寄り添い、場をつくる行為であるということに改めて学ぶ、非常に意義深い経験となりました。（声楽領域2年 瀬戸口祐也）

昨年度から引き続き本授業を履修し、実践を重ねる中で、その都度新たな発見や課題に向き合うことができました。2年間では学びきれないと感じるほど内容は多岐にわたっていましたが、先生方や同じグループの学生と意見を交わしながら、「聴いてくださ

る方に何をどのように伝えるか」を考え、形にしていく過程は非常に充実しており、実践後に得られる手応えも含めて、純粹に楽しいと感じられる時間でした。普段クラシック音楽に馴染みのない方々に聴いていただく機会が多いからこそ、まず自分自身が音楽を心から楽しむことの大切さを強く実感しました。自分が楽しめていなければ、音楽の魅力や素晴らしさを相手に伝えることはできないという、当たり前でありながら日々の活動の中で見失いがちなことに、何度も気付かされる授業でした。

また、音楽以外の様々な分野の先生方による講義を通して、多角的な視点を持ち、それをアウトリーチ活動に生かすことができた点も大きな学びでした。音楽大学という専門性の高い環境に身を置く中で、一般社会の視点や感覚に触れることは非常に有意義であり、特にアウトリーチ活動においては、一般の方々と関わる機会が多いため、音楽的専門性だけでなく、幅広い知識や社会的感覚が必要であると感じました。

大学院修了後も、このような活動を継続していきたいと考えています。クラシック音楽の敷居を安易に下げることなく、その本質的な魅力をどのように伝えられるかを常に考え、多くの人に親しみを持ってもらえる奏者になることが、今後の目標です。

(管・打楽器領域 2年 山下菜々)

私は今年度1年間のみを受講でした。後期授業では豊田西病院の外来患者の方々へ向けたアウトリーチを行いました。プログラムを組むにあたり、患者さんに喜んでいただくことと、私たちだからこそできる価値ある演奏をお届けすることの両立について試行錯誤を繰り返しました。当日の実践では、患者さんが私たちの演奏をとっても集中して聴いてくださり、私の楽器紹介でのスライド体験も楽しんでいただくことができ、嬉しかったです。また質疑応答での突然のリクエストに応えた際にも大きな拍手をいただき、皆様に喜んでいただけたことを実感することができました。また一方で、反省点としては、お客様の目線で考えることの難しさを実感しました。奥行きのある客席では前列と後列で見え方が全く異なり、後列の方が前列の方と同じように楽しむための工夫について課題の残る実践となりました。特に皆様と一緒に歌う場面では、歌いやすくするための説明や誘導の丁寧さをもっと重視すればよかったと感じました。また演奏とMCの尺のバランス、曲間ごとのMCの長さについても難しさを実感しました。

今年度の授業でアウトリーチについて深く学ぶことができました。この学びを今後の演奏活動にも活かしていきたいと思います。(管・打楽器領域 2年 山家隆司)

後期のアウトリーチでは、患者さんが体を揺らしながら演奏を聴いてくださる様子や、明るい表情で帰っていかれる姿を見ることができ、音楽を届ける意味を改めて感

じました。特に、「上を向いて歩こう」は曲名を伝えただけで反応があり、親しみのあるレパトリーの持つ力を実感しました。一方で、自分の専門的な曲を演奏するときのMCが、少し難しく聞こえてしまう場面があり、内容や話すスピードなど、もっと工夫が必要だったと感じました。また、演奏する際には、空間や環境に応じて音量を調整すること、話すときのトーンや抑揚によって相手との距離感が変わることなど、コミュニケーションに関わる多くのことを学びました。

この授業を通して、演奏技術だけでなく、相手に寄り添いながら音楽を届ける姿勢の大切さを強く実感しました。
(声楽領域1年 畑こはる)

前期に引き続き本授業を受講しましたが、後期は前期に伺った保育園でのアウトリーチとは全く異なる、病院という環境での実践を経験することができ、大変貴重な学びとなりました。対象や場の雰囲気が異なることで、演奏や関わり方にも違いが生まれることを実感しました。

特に今回は豊田西病院での精神疾患を抱える患者さん向けのアウトリーチであったため、演奏前にはどのような雰囲気になるのか、音楽がどのように受け取られるのかについて少し不安を感じていました。しかし実際には、終始とてもあたたかい雰囲気の中で聴いてくださり、音楽を通して安心感や心地よさを共有できたように感じました。この経験から、音楽には相手の状況や環境に寄り添う力があるのだと改めて実感しました。

一方で、演奏以外の面ではMCに関して多くの反省点が残りました。わかりにくい表現になってしまった場面があったと感じています。限られた時間の中で、相手に伝わる言葉を選び、簡潔に話すことの難しさを強く感じました。

来年度も本授業を引き続き受講する予定ですので、今回の経験を踏まえ、対象や場に応じた関わり方をより意識しながら、アウトリーチ活動に取り組んでいきたいと考えています。
(鍵盤楽器領域1年 奥ノ坊悠)

後期、名城病院での演奏アウトリーチを通して、多くの学びと課題を実感しました。今回は声楽2人とピアノ1人という編成で、クラシック音楽に馴染みのない方でも親しみやすい日本語の曲を中心にプログラミングできた点は大きな成果でした。また、演奏会の導入でお客さんの心を掴む「エントリーポイント」の重要性を意識し、演奏前に曲のモチーフに関する三択クイズで聴取の注目ポイントを明確にした結果、終演後のアンケートで冒頭の曲が印象に残ったという声があり、工夫の効果を感じました。

一方で、演奏中の反応が予想以上に小さく、MCの投げかけ方に戸惑う場面があり

ました。保育園アウトリーチとは異なる難しさがあり、臨機応変に対応する力の必要性を痛感しました。さらに緊張から早口になってしまい、患者さんの会話スピードに寄り添えなかった点や、シェアードゴール（病院と奏者との共通目標）と曲選択の関係を十分に説明できなかった点も反省として挙げられます。

今後は今回の学びを活かすとともに、グランドピアノでない環境での演奏の難しさも踏まえ、授業外でアウトリーチ演奏活動を行う際には会場選びの重要性を意識していきたいです。
(鍵盤楽器領域1年 小野心音)

今回のアウトリーチコンサートでは、病院に通う患者さんや、医療従事者の方々など、普段コンサートホールに足を運ぶ機会の少ない方々に音楽を届けることができ、とても貴重な時間となりました。演奏中、患者さんの反応が近く感じられ、音楽がその場で直接届いている実感があったのが印象的でした。曲の雰囲気に合わせて表情が変わったり、体を揺らして聴いてくださる姿から、音楽の持つ力を改めて感じました。演奏者として、ただ弾くだけでなく、空間を聴き手と共有することの大切さを学ぶ機会となりとても貴重な経験でした。今回の経験を、今後の演奏や表現にしっかり生かしていきたいです。
(鍵盤楽器領域1年 武藤寧音)

私は1年間通して本授業を受講しました。初めて取り組むアウトリーチでしたが、前期の授業では、アウトリーチの理念や社会的役割、対象者の特性に応じたプログラム構成、伝わりやすいMCの方法など、実践に向けた基礎的視点を体系的に学んだうえで、実践は北保育園（知多郡武豊町）で行いました。

後期ではその学びを踏まえて病院アウトリーチを実施し、豊田西病院での公演を通して、音楽が人と人をつなぐコミュニケーションとして機能することを実感しました。聴いてくださる方一人一人の反応を感じながら演奏する中で、技術的な完成度だけでなく、場の空気を読み取りながら柔軟に表現や言葉を選ぶ力の重要性を学びました。また、演奏者と聴き手が同じ時間と空間を共有し、共に音楽体験を創り上げていくことがアウトリーチの本質的な価値であると理解しました。授業を通して得た視点を今後の演奏活動にも活かし、社会とつながる音楽実践を続けていきたいと考えています。
(管・打楽器領域1年 野々笑莉)

前期とは全く違う編成で後期のアウトリーチの授業に臨みました。プログラムを考える上で、前期で考えた保育園の時と考えることが全く違って、選曲がとても難しく感じました。保育園の時は対象の年齢や人数があらかじめ決められており、伝えたいことや曲の雰囲気も想像しやすい印象だったのですが、今回伺う予定だった藤田医科

大学病院はロビーのような開けた場所での演奏ということで、対象の年齢や人数が絞れませんでした。幅広い世代に受け入れられて、しかも音楽を通してどこか懐かしい気持ちになってもらうような曲を打楽器ソロで何ができるか考えた時に、有名な曲ではなかったのですが、日本がルーツの楽器を使用したソロ曲を考えました。

私の体調不良のため、実際に病院で演奏させてもらうことは叶わなかったのですが、実際にランスルーをやる時には打楽器のセットを動かしたりする時間を考えておらず、変な間ができてしまう可能性もあったと反省しています。ランスルーだけでは分からないこともあったと思うので、来年度も履修して実際に病院で演奏をする機会をいただけたら嬉しいと思っています。 (管・打楽器領域1年 田爪佑佳)

◎前期のみ/後期のみの受講生

保育園でアウトリーチをさせていただき、今回はピアノ、声楽、トロンボーン、ヴィオラの4人編成で訪問しました。音楽劇という形で、音楽の魅力や楽しみ方を伝えられるよう試行錯誤を重ね、それぞれの個性を活かしつつ、子どもたちにも伝わりやすい内容になったと思います。初めて見る楽器や生演奏に目を輝かせて聴いてくれたり、身体を揺らしたり歌ってくれる子がいる一方で、大きな音や初めての体験に驚いて泣き出してしまいう子もいました。そんな中でも、メンバー全員で臨機応変に対応しながら作り上げた今回のアウトリーチは、どの瞬間も忘れられない経験となりました。短い時間でしたが、音楽を通して子どもたちと心が通ったと感じられ、アウトリーチの意義を改めて実感しました。ぜひまた訪れたいです。

(鍵盤楽器領域2年 北川温子/前期のみ受講)

前期に保育園でのアウトリーチを行いました。園児の雰囲気や様子が、自分が想像していたものと違って驚きましたが、一人ひとりさまざまな反応があっもおもしろかったです。私達のグループは一から台本を作り、劇と音楽を合わせたプログラムとなりました。人前で話すのが苦手なため、演技をすることに苦戦しましたが、回数を重ねるごとに、子ども達に伝わりやすい話し方に変えたり、アドリブをしたり、自分自身が臨機応変に対応できるようになっていくことが楽しかったです。

(弦楽器領域2年 寺島はな/前期のみ受講)

初めてアウトリーチを経験しました。どのようにしたら子供たちに興味を持ってもらえるのか、自分が音楽を通して伝えたいことは何なのか、アウトリーチの意義とは何なのか、沢山のことを考えた期間でした。本番を迎えるまでは、子供たちが座って聴いてくれるのか心配していましたが、じっと見つめてくれる子がいたり、ノリノリ

で手拍子をしてくれる子がいたり、それぞれが素直に反応してくれて、とても嬉しく思いました。どれだけMCや進行の準備をしても、相手が子供だとその場で何が起こるのかは分からないので、瞬時に対応できる能力を身につけたいと思いました。これからも幅広い世代の方々に音楽を届けられるように頑張っていきたいですし、アウトリーチ活動にも積極的に取り組んでいきたいと思いました。

(弦楽器領域1年 門永希／前期のみ受講)

今回初めてアウトリーチに取り組みましたが、「園児たちにこのアウトリーチを通して、どうなって欲しいのか」という目的のもとで全体を構成する事の難しさを実感しました。特にMCでは、私達の考えを押し付けるのではなく、園児たちに主体的に感じてもらえるための言葉遣いや表現を考えるのが難しく、自身の園児に対する理解度の低さを痛感しました。しかし、内容を欲張らずシンプルにしたことで、園児たちにとっても分かりやすく、楽しんでもらえたのではないかと思います。

また本番を重ねるにつれて、自身の成長も実感できました。園児から自分たちが今どう見られているのか考える余裕を持ち、それに即した行動や声掛けを行うこと、また園児たちの注目を誘導するための行動や間のとり方など、次第に実践の中で取り入れることが出来るようになりました。

今回の授業を通して、対象の聴き手をよく理解すること、自分だからこそ出来る音楽を届けることの大切さを学ぶとともに、子供たちの素直な感性に私自身も触発され、新たな気持ちで音楽と向き合う、とても良い経験となりました。

(弦楽器領域1年 加藤七帆／前期のみ履修)

今期が初めてのアウトリーチの受講だったこともあり、準備の進め方や取り組み方に不安を感じましたが、音楽を届ける対象や環境を考えながらプログラムを企画し、言葉の選び方や伝え方などを工夫しながら準備していく中で、多くの気づきや発見がありました。聴き手の立場にたち、どのような内容が求められているか、適切であるかを検討していくことは、普段の音楽活動とはまた違う視点が求められるため、難しさも感じました。

私たちのチームは実践が中止となってしまい、悔しさを感じていますが、活動が多くの状況に左右される現実や、予期せぬ状況への柔軟な対応の必要性を考えるきっかけにもなりました。実践に至らなかったもののアウトリーチを構築する過程自体が有意義な学びとなり、授業で得られたことをこれからの演奏活動に活かしていきたいと感じています。ありがとうございました。

(鍵盤楽器領域1年 天野実音／後期のみ受講)

今回初めてのアウトリーチ活動でしたが、先生方や病院関係者の方々に支えていただき、無事に本番を迎えることができました。豊田西病院の中でも病棟内でのコンサートは初の試みとのことでしたが、想像以上に患者さんの温かい反応が多く、嬉しかったです。演奏している際にも、音楽に合わせて身体を動かしている方や、思い出の曲で涙を流されている方もいらっしゃったのが印象的でした。特に、最後に演奏した中島みゆきの「糸」では、患者さんと一体となって一緒に歌を口ずさむことができ、音楽で初めてお会いした方々と繋がるのが出来たような不思議な体験をしました。終わった後の病院の方々からのフィードバックでは、今まで長い間部屋から出てこなかった患者さんが今回の演奏を聴きにきてくださったと伺い、一つの行動を起こすきっかけとして音楽があれば良いなと思いました。今回学んだことを今後の音楽活動の糧にしていきます。貴重な機会をありがとうございました。

(鍵盤楽器領域 1年 緒方優月／後期のみ受講)

初めてのアウトリーチで分からないことだらけでしたが、先生方やメンターの方々のおかげで、最後までやり切ることができました。とても勉強になる経験で、参加できて本当に良かったと感じています。アウトリーチ活動を通して、準備が何よりも大切であり、同時にとても大変であるということ学びました。患者さんがどのような音楽を求めているのかを考えてプログラムを組むことや、退屈させないためにMCを工夫することなど、準備期間が特に印象に残っています。藤田医科大学病院での本番はとても緊張しましたが、患者さんが温かく、立ち止まって聴いてくださる方もいて、緊張よりも楽しさや嬉しさの方が勝っていました。終了後には患者さんから温かい言葉を頂けたので、大きなやりがいを感じました。反省点は多くありますが、特にMCでは緊張から患者さんの表情を見る余裕がなく、台本を意識しすぎてしまいました。人前で話すことにまだ慣れていないこともあり、今後はさらに練習を重ねる必要があると思いました。この経験を今後の音楽活動に活かしていきたいです。

(鍵盤楽器領域 1年 藤井彩乃／後期のみ受講)

初めての病院アウトリーチで病棟を担当することとなり、当日はとても緊張していましたが、患者さんたちが私たちの演奏を静かに聴いてくださり、あたたかい拍手を送ってくださったことで、次第に心がほどけていきました。音楽を通して同じ時間を共有できたことが何よりも嬉しく、幸せなひとときでした。最後のプログラムとして準備していた中島みゆきの「糸」では、患者さんや病院関係者の皆さまにも歌っていただき、想像以上に力強く、やさしい歌声に演奏している私自身が胸を打たれました。終演後、病院関係者の方から、普段はイベントに参加されない患者さんが今日は参加

してくださっていたと伺い、音楽の持つ力の大きさを改めて実感しました。今回のアウトリーチではプログラムの組み方や、MCの話し方などとても勉強になりました。今後の音楽活動に活かして行きたいです。

(鍵盤楽器領域 1年 堀川愛夏／後期のみ受講)

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」

2025年度報告書

2026年3月31日発行

編集・発行 愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」委員会

〒480-1194

愛知県長久手市岩作三ヶ峯 1-114

愛知県立芸術大学 安原研究室気付

TEL: 0561-76-2851 (芸術情報・広報課) FAX: 0561-62-0083 (代表)

E-mail: outreach@mail.aichi-fam-u.ac.jp

印刷 株式会社ウエルオン

〒464-0858

名古屋市千種区千種 2 丁目 1 番 28 号

TEL: 052-732-2227 FAX: 052-733-3178

URL: <http://www.well-on.co.jp/>